



写真・市谷 健「スカッとしたな!」「うん」

成長するために

ダスキンでは、毎日、朝と夕は祈りに始まり、祈りで終わります。創業者鈴木清一が始めたのですが、私たちは悩みをかかえ、弱くてくじけやすい人間なので、自分の足りなさを反省し、自分が今日まで歩んでこられたのも多くの方々のお陰であると、日々感謝の思いを忘れないようにしたいとの願いがこめられています。

答えは様々でしょうが、最終的には人を助け、人さまのお役に立ちたい、人から喜ばれるとき、素朴かもしれませんが生きがいを感じます。ある方が学校教育の掃除当番について語っていました。「掃除当番と云うのは、お掃除をしたくないという前提のもとに、やりたくないがやらされている。そこにお掃除に対する誤解や間違いがあるのだ」と。お掃除をさせてもらうのが楽しいという気持ちになりたい。「あなたはやらなくても結構です」と言われるよりも、自分が掃除をすればみんな心地よく過ごせるのだと

読者の心を願って
読む人の心を願って

喜びの タネまき 新聞 no.510

思えば、お掃除も楽しくなるはず。やらされているという受け身では成長はなく、「やってやろう、頑張ろう」という率先する心がけで行動すると、見えて来るものが違ってくるのではないだろうか。まだまだ、至らない自分自身ですが「どうやって喜びのタネをまこうか」を現実、行動として力強く実行していきたいと思っております。

株式会社ダスキン社長

山村 輝治

前回はたった1時間の出来事。今回は資格をとってマッサージュ師としてスタートした友人と、初めて沢登りに行った日のこと。その日ぼくを突き動かした思い出が、現在までの時間をまっすぐに開いたような気がします。幼なじみとの友情の長い道程です。

「一緒に帰ろう」



絵と文 中村みつを

イラストレーター、画家。絵と文の作品は自然・旅・人がテーマで、心の和む温かさ。読売新聞夕刊のみなみらんぼうのエッセイ「一步二歩山歩」に挿絵を描き、新聞連載最多記録14年目。日本山岳会会員。著書に「のんびり山に帰るはのぼる」(山と溪谷社)、「お江戸超低山さんぽ」(書肆侃侃房)、「森のくらし」(リヨン社)など。

いま考えると、高いの夏休みにどうしてN君を初めての沢登りに誘ったのか。沢登りは滝などを避けるので経験や知識が必要なのに、何度も行った山だという傲りがあったかもしれない。

奥多摩の狭まった谷にとりつき、小さな滝も順調に越えて進んだ。しかし沢の最後の二股のところ、右か左かはたと迷った。絶望と希望の分かれ道という焦りの一方で、まだ甘い期待もあった。計画通り尾根まで上がれば、そこはおなじみのハイキングコースがあるはず……。

最後は決めるしかない。一か八か左の涸沢を選んだ。どう駆け上がったか、どれくらいの時間が過ぎて行ったのか、まるで覚えてない。辿り着いたそこは、期待した尾根でなかった。ぼくたちは途方に暮れたまま、夕暮れ迫る遠い空をぼんやり眺めていた。

そんな時にぼくは急にキジ撃ちの山で言う用便を催してしゃがんだ。尻に触れた何か。それはスギの苗木を支えた針金だった。見まわすとそこはまだ背の低いスギの植林地だったのだ。「ここを下って行けば帰れるぞ!」

思わず大声で言った。暗闇が迫る。もう急ぐしかない。N君は替えた声で「みつちゃん、よく見えないよ。オレ鳥目かもしれない」と涙をこぼした。分かっていたはずだった。中学の野球部を「夕暮れになるとボールが見づらい」と辞めたN君。彼

「何か見えるの……」N君が小さく声を詰まらせた。「あと少し……」と一言を詰まらせた。「あと少し……」と一言を詰まらせた。「あと少し……」

の手を握りしめ、沢登りに誘ったことを謝り、「一緒に帰ろう」そういつて尾根をゆっくり下った。日が沈むと、代わりに大きな月あかりがぼくたちを照らした。何度も足を取られながら、「今日は月がでっかいよ、だから大丈夫さ」と暗闇に負けないように力を振り絞った。やがて眼下に一軒の家の灯。おうとして、言葉にならないまま、ぼくはもう、涙が止まらなかった。

「五平餅」 しっかりと本格派と変化をつけたジャコ入り

つぶしたご飯を串にさし、特製ダレをつけて焼いた「五平餅」。今回はシンプルな赤味噌ダレと、独特な味付けをしたさんまダレの2種類を作ります。



お料理研究家 こいけりえ

おやつ時間 簡単、美味しい楽ラクレシピ



●作り方(8本分) ●下準備 温かいご飯400gをボウルに入れ、すりこぎを水にぬらしながら、お米のつぶつぶ感がなくなるまでつぶす。粘り気が出るくらいになったご飯に、塩少々と小麦粉小さじ1を入れて混ぜ合わせる。つぶしたご飯の半分を別のボウルに移して、白ゴマ10g、チリメンジャコ10g、細かくきざんだ青シソ3枚を入れて、しゃもじで全体を混ぜ合わせ、ぬらしたすりこぎでもう一度たたき4等分にする。このり半分のご飯も4等分にする。



割り箸は、ご飯やつぎのすりこぎのように、乾いたまま、お湯に濡らさず使う

●形作り 白いご飯、ジャコ、飯各4個分は、手をぬらし、ギュッと握って固めて小判形にする。割り箸しを押し当て、包むようにご飯を巻きつけて、しっかりと形を整え、両手の平ではさんで押し付ける。8本分が出来たら、皿に並べて10〜20分乾かしておく。表面が少し固くなる感じに乾かしておくと、焼くときにきれいに焼けます。

●タレ作り

ご飯を乾かしている間にタレを作る。 ●赤味噌ダレ 鍋に赤味噌50g、砂糖40g、みりん大さ



割り箸は、焼くときに外側にトースターやグリルで焼く場合は、アヒル足のように使う



五平餅

●焼く 焼き網に油を塗り、火にかけて少し温めたらご飯をのせ、中火で白焼きにする。指で触って乾いた状態になったら、ひっくり返して片面も同じように焼く。 白いご飯には赤味噌ダレ、ジャコご飯にはさんまダレを片面だけに塗り、裏面に少し焦げ目がつくようにこんがり焼く。タレが温まり、香ばしい香りがしてきたら完成。 さんまダレは表面に青シソをつけて食べるとさっぱりとして美味しく召し上がれます。



「雨でもオシャレなの」 京都府木津川市 酒井京美



「おいしいネ!」 北海道室蘭市 佐藤恵子



よーい、どん! 奈良県香芝市 植嶋順子

家族や友だちにしか撮れないステキな笑顔、みんなに見てもらいたいわたし好みの1枚。もちろんかわいいペットも撮れたら送ってください。お待ちしております! (詳細は7ページ)

みんなで決めた
「みんなの村やき」

高知の山の中。川底の小石までみえる川を上流へたどると、行きどまりに現れるのが床鍋だ。戸数38戸、集落の中央に建つ元校舎が「森の巣箱」。いい名ですねとほめると施設長の大崎登さんはこっと笑った。「巣箱

しかないと思いついた。で、森だから森。みんなで決めた」
もともと、床鍋は林業と炭焼きの村。最盛期には100人もの児童がいたという。しかし、輸入外材に林業が押され、人は出て行き、学校は20年前に廃校、やがて「なにをやってもしょうがない」、そんな諦めの空気が村をつつんだ。

入口には下駄箱がある。木の階段はきしむ音が心地よい。

村のみんなが
したいことをしゆうがい

森の巣箱

はコンビニ兼
お宿兼居酒屋



山の廃校を集落のみんなの知恵と

出資でコンビニに再建。2階がお宿の木造校舎は一度は泊まってみたくなるなつかしさ。

高知県津野町床鍋（せとがま）に施設長の大崎登さんをお訪ねしました。



「教室が泊まるお部屋」と大崎夫妻。

小さな幸せを積み重ねる
「かんたんにできる」ことやき

そこに光が射したのは、1本のトンネルが出来た8年前だ。町へ繋がる道は、集落の人たちの気持ちに風穴をあけ、背中を押した。
「なんとかして、みんなで集落の未来を変えよう」話し合いを重ね、みんなの頭にうかんだのが床鍋中学校だった。

「廃校になり、お化け屋敷みたいになっても、みーんなが好きだった。やっぱり、たくさん思い出のつまったところやき」

平成15年、市町村活性化の補助金を使い、床鍋中学校を改装した。「日用品が買えるお店が欲しい」「一杯飲んで集まりたいよな」と1階にコンビニと居酒屋を作り、宿泊施設がないと補助金が出ないというので、2階は泊まれるようにした。運営費は集落全体で管理していた分業林の収入をあてた。

車のないお年寄りも来られる店を切り盛りするのは妻の大崎智子さん。泊まり客が多い日はみんなで食事作りも手伝う。

なんとと言っても醍醐味は、村の人たちとお客さんとの交流。特に居酒屋は宿泊客と村の人たちで、週末には満員になる程の賑わい。

「酒を飲みながら語るのが、高知の人間」と、お酒に強くない大崎さんも、この時ばかりはお客さんが寝るまで飲み交わす。

「自分のしたいことをしゆうがい」「巣箱のイベントは蛍ツアーやフルーツの演奏、夏祭りや盛り沢山。極めつけは、巣箱から羽ばたいて欲しいと、常連さんの結婚式の会場に！」

村が元気を取り戻す中、家で1人で留守をしているお年寄りにも、楽しみとやりがいを見つけてほしいと考えたのが、ししとうのパック詰め。86才になる大崎さんのお母さんも通っている。学校の前にある元公民館に集まっの共同作業は刺激に



「楽しいよ」手も口も休めず作業中です。

生鮮食品からお酒、洗剤まで何でもある店。

なり、生涯現役と、今はみんなが張り切っている。

歴史始まって以来、人の来たことがない村だったという。「なんでこんなに不便な山奥に生まれたか」と思ったけれど「この地域で一番元気な集落になった」と笑った大崎さん。実は小学校も中学校も床鍋の最後の卒業生だった。

かんたんで小さくていい。幸せを一つ一つ積み重ねることの大切さを教えてくれるのが、元学校だった「森の巣箱」である。



運動会

青森県八戸市 大久保和子

「よいい、ドン！」3歳の女の子3人だけの徒競走。合図が鳴ると同時に飛び出した先頭の女の子は速い速い！もうひとりはずつたりスタート。残った我が家の孫は3番手。出遅れたものの、スタスタと走り出し、2番手の彼女を抜き去りました。「オッ！いいぞ、頑張れ！」と叫ぼうとした途端、孫はすぐに振り返り「一緒に行こう」と手を差し伸べ、ふたり仲良く手を取り合って一周し、ニコニコと天使の笑顔でゴールしました。聞けば、練習でもこのパターンだったそうで、またまたびっくり。

3人兄弟の真ん中の彼女は、両親や私達の熱い応援をサラリとかわしていつもの笑顔。心なんだ運動会でした。

——速いだけが全てじゃない徒競走、目からウロコ。

フォトメッセージ

山口県下松市 石田裕子

妊娠を機に、7年間勤めていた看護師の仕事辞めることになった。大変なことあったけど、周りの温かいフォローもあって、今となっては、それも楽しい思い出です。

お世話になった病棟へ最後の挨拶に行った時、私はお菓子袋とフォトメッセージを配りました。私の趣味は写真撮影。この人には向日葵の写真。この人は海の写真。と、一人一人をイメージして選んだ写真の裏にメッセージをそえました。職場の人達を思いながら書いてみると、いつものまにかフォトメッセージは30枚以上に。不妊で悩んでいた私が妊娠した時に、自分のことのように泣いて喜んでくれた人もいました。こんなに多くの優しい人たちと働けて、幸せな職場だったと改めて感じました。

これから、私は念願の母親になれるけれど、我が子にも、人の優しさを感じて大切にする子になって欲しいと願っています。

——おめでとう。お幸せに♡

ほめ言葉

熊本県合志市 井子文

10歳になる孫達と接していると、いろんな言葉の宝に出会えます。

もう5年くらい前のことですが、洗濯を終えた時のことです。干そうか干すまいか、曇り空を見上げて迷っていると、厚い雲の切れ間から、一筋の太陽の光が射しました。

「太陽さん、もつと顔を出してー」と言う私に、「ばあちゃん、お日様が今日は朝寝坊したんだよ。はずかしいから、そつと顔を出しているの」と孫が言いました。本当だねと言いつつ、洗濯物を干していると、目の前にある仕事ばかりを追いかけて、おおらかな気持ちを忘れかけている自分に気付かされました。

先日「ばあちゃん、何歳？」「67歳よ」「いいなあ。60年すると、こんなに優しい手になるんだね」と大きなほめ言葉をもらいました。子どもたちから学びつつ、60年の生きた知恵を使い、毎日をおくりたいものです。

——子どもの10歳の心についていようねー

考え方

北海道室蘭市 秋谷誠二

私たち夫婦は15年前まで東京のマンション管理会社で、7階建て3棟の住み込み管理人をしていました。当時、真夜中にエレベーターの緊急ボタンを押すイタズラがありました。

真夜中に鳴る警報器！初めは駆けつけても、度重なる腹も立ちます。「またイタズラだった」と怒ると、興奮して眠れません。1年ほど続き、我慢も限界と思った頃、ふと気がつきました。「本当の事故なら、ふとんに帰って寝るところじゃない」と。考え次第では、安全を確認したら後は、ほつと安心して眠ればいいわけです。

イタズラのうちが有り難い。それからは、穏やかな気持ちで管理人の仕事が出来るようになりました。

——いんてんたれびん。

サンドイッチ

秋田県湯沢市 松岡和佳子

まだ小学生だった二人の子供達と3人でレストランに行った時の話です。

姉と弟は並んで楽しそうにメニューを見ながら注文。やがて美味しそうなサンドイッチが運ばれて来ました。「おなかがいっぱい」。食べ終わって店を出ると、息子が何やらポケットから取り出しました。見ると、ナプキンに包んだ食べ残しのサンドイッチ。「あら、どうして？」

「だって、せっかく店の人が作ったのに、残したお皿を見たらかわいそうでしょ」こっそり持ってきたそうです。子供なりの気遣いでした。

その息子も社会人となり8年目を迎えます。あの頃の思いやりの気持ちはそのまま続いているようです。

——やんこめ。

お手伝い

岩手県三戸市 藤本淳子

5歳になる次女が「お手伝いしてあげる」と言うので、「何でもいいよ。おそうじ手伝って」とお願いしました。すると台所へ行き、たまっていた皿や鍋を一生懸命洗い始めました。初めての皿洗いが、すみからすみまで丁寧に洗っており、その姿を見ていつのまに成長したのだろうと感心しました。

普段は外で泥遊びばかりしている娘も、知らず知らずのうちに、母である私の姿を見てくれていたんだな〜と思いました。何だかとても嬉しくなりました。

娘の将来の夢は看護師さんです。優しくて思いやりのあるステキな看護師さんになって欲しいと思います。

——おしだんごちゃん。



広島市 横山鈴佳

「ほら、とびいたよー」

しきり直し

仕事を頼んでも、すぐやれない人があります。そんな時は、お相撲のしきり直しを思い出します。立ち上がりには両者の呼吸がとどるのが大事です。相手に「サア、時間一ぱい立ち上がりですよ」とうながして、もう一度、しきり直しをする気で相手の立ち上がるのを待ってあげましょう。

あなたのお便りや写真をお寄せください

●投稿には、名前、年齢、職業、住所、電話番号、現在ご利用のダスキンの店名をお忘れなく。紙面やホームページでご紹介させていただいた原稿や写真にはお礼をさせていただきます。

●送付先
〒163-0223 東京都新宿区西新宿2丁目6番1号 新宿住友ビル23階(私書箱47号)

ダスキン「喜びのタネまき新聞」編集室
電話 03(5909)6703
e-mail:koho4@mail.duskin.co.jp

無料 おそうじ相談 実施中!

ダスキンコールセンター 平日の9:00~17:00
0120-100-100

No.419からのバックナンバーが下記のアドレスからご覧になれます
http://www.duskin.co.jp/torikumi/tanemaki/index.html

- 2ページの中村みつをさんのアトリエ 〒167-0022 東京都杉並区下井草5-12-10-109
- 4-5ページの農村交流施設「森の巣箱」の連絡先 〒785-0210 高知県高岡郡津野町貝ノ川床鍋392-2 電話:0889-40-1703(営業時間:10:00~18:00)

チャレンジ!

~あの瞬間を今に~

★'83 アメリカ合衆国

第1期海外研修派遣生 日本語教師(米国在住)

桑名敦子さん (肢体不自由)

カリフォルニア州パークレーでは障害のある人も社会の一員として働き、地域交流をしていました。「私も仕事をもち、家庭を築き子供を育てて…誰もが思い描く生活を送りたい」。湧き起こる想いを抑えられず、研修先で出会ったのちのパートナーが暮らすアメリカへの移住を決意しました。結婚し一児の母となれたのは自ら決断し責任を負うという大切な考え方を愛の輪の研修で学んだからです。

このコーナーについては 広げよう愛の輪運動基金まで。

☎06-6821-5270 HP (http://www.ainowa.jp/)

今年30周年を迎える愛の輪は日本とアジアの地域社会のリーダーを目指す障害のある若者に、福祉先進国での研修支援を行っています。

「カプセルーションクリーニング」は
エコなカーペット洗淨

「カプセルーションクリーニング」は、ビルなどの事業所用カーペットを節水・節電でクリーニングする新技法。少量の水で洗うことができるので汚水もわずかです。短時間で作業でき、カーペット素材にやさしい洗淨でパイルが長持ちします。



えほんコーナー

(ダスキン環境シンボルマーク)
エコタネ
身近に、未来に、エコのタネまき。

詳しくはwebで「ダスキンのエコ」を検索してネ。

ダスキンのお客様係募集中!!

詳しくはwebで お客様係 検索

※お仕事内容や募集要項をご覧ください。



携帯からもアクセス

お楽しみクイズ

カプセルーションクリーニングは
何を洗うもの？

-



正解者の中から30名様に
「くらしキレイBOX」を
プレゼント!



下記の要領でご応募ください。

- ◆ハガキに
 - ①クイズの答え②郵便番号③住所④氏名⑤年齢⑥性別
 - ⑦電話番号⑧現在ご利用のダスキンの店名をご記入の上、下記であて先までお送りください。

◆あて先

〒163-0265
(株)ダスキン「喜びのタネまき新聞no.510」
クイズプレゼント係

※お楽しみクイズ専用の住所不要のあて先です。

- ◆締め切り 平成23年11月25日(金)当日消印有効
- ◆ダスキン関係者の応募はご遠慮ください。
- ◆当選者の発表は、プレゼントの発送をもってかえさせていただきます。(平成23年12月中旬お届け予定)

◆応募に関してのお問い合わせ TEL:03-5909-6703

※抽選結果に関するお問い合わせはお受けできません。予めご了承ください。

今回ご応募いただいた個人情報については、(株)ダスキンの範囲内でのみ利用させていただきます。プレゼントの抽選・発送の目的以外には使用いたしません。個人情報に関するお問い合わせや、ご自身の個人情報の開示・訂正・利用停止については、(株)ダスキン「喜びのタネまき新聞」クイズプレゼント係 TEL:03-5909-6703 までご連絡ください。

no.508のクイズの答えは「洗(剤)」でした。

郵便番号は
お間違いなく!

●この新聞をお届けしているのは

株式会社 **ダスキン**

発行：広報・広告部 〒564-0051 大阪府吹田市豊津町1-33

編集：「喜びのタネまき新聞」編集室

〒163-0223

東京都新宿区西新宿2丁目6番1号 新宿住友ビル23階(私書箱47号)

TEL:03-5909-6703 FAX:03-5909-6771

【お客様の個人情報の取り扱いについて】

お客様の個人情報は商品のお届けや回収、サービスの提供に利用させていただきます。また、後日商品やサービスのご案内をさせていただく場合があります。なお、お預かりした個人情報はダスキングループ企業と加盟店の範囲内で利用させていただきます。配送業務等で個人情報を外部企業に委託する場合は、弊社の厳正な管理の下で実施します。

個人情報に関するお問い合わせや、ご自身の個人情報の開示・訂正・利用停止については、下記ダスキンコールセンターまでご連絡ください。

■ダスキンコールセンター

0120-100100 www.duskin.jp